

親鸞仏教センター通信

2007.
September

2007年9月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.tomo-net.or.jp>

第23号

ひと 他人を傷つける言葉

親鸞仏教センター研究員 山 本 伸 裕

「貧乏人は麦飯を食え」——かつて、この国のある首相はそう言ったとか。カネがなければ質素な食事で糊口をしのぐ。これは、ある意味、やむを得ざる成り行きである。にもかかわらず、この発言が多くの人びとに違和感を与えるのはどういう理由か。

倫理・道徳というのは、必ずや宗教に立脚しなければならない、と強く主張したのは清沢満之である。そこに含意されているのは、「論理的正しさ」と「倫理的正しさ」とは必ずしも一致しないということである。「宗教」とは有限な目的へと向かうものではなく、どこまでも無限の理想に向かうものである、というのが清沢の宗教定義である。このような「宗教」に立脚して成り立つ道徳(宗教道徳=真正の道徳)の見地からすれば、「貧乏人は麦飯を食え」というものの謂いは、けっして許されるものではない。宗教道徳の理想は、自分が麦飯を食うことになったとしても他人には麦飯を食べさせるような貧乏を与えないということではなければならないからである。

この私に当てはまる真理は、同様に他人にも当てはまるものでなければならないというのは、論理の世界においてのみ妥当することである。宗教的真理にとって決定的に重要なことは、真理というものは一人ひとりの主観においてしか成り立たないということである。

清沢は「宗教の門にはいった者は、自分を非常に侮り、非常に軽するのである」(『清沢満之全集』第6巻125頁、岩波書店)と述べている。そのようにむしろここでは、この私という存在は徹底的に軽んじられることになる。このことは、「われを滅する」ということにほかならないのだが、それは、どこかこの私という存在を超え、なおかつそれを包むような大いなる存在を感じることはなしにはありえないことに違いない。

志賀直哉は無限に向き合うときに感じる己の卑小さを、「ナイルの水の一滴」に見立てて次のように述べている。

例えて云えば、悠々流れるナイルの水の一滴のようなもので、その一滴は後にも前にもこの私だけで、何万年 遡っても私はいず、何万年経っても再び生まれては来ないのだ。しかも尚その私は、依然として大河の一滴に過ぎない。それで差支えないのだ。

実際、志賀にとって、「芥子粒にも満たない」ような自己の卑小さを「軽する」ことは、同時に大いなるものとの出遇いのなかの救いでもあったのである。

こうした感得のなかから他人に対して言葉が発せられるときには、言葉はたんなる論理性・客観性の次元を超えたものになるはずである。論理的にはいくら正しくても「あなたにだけは言われたくない」ということは多々ある。「親鸞一人がためなりけり」という『歎異抄』の言葉は、相対性を脱した非対称性の自覚を絶妙に言い当てているのである。

われを軽んずることで道徳が成り立ち、われを軽んずることで逆に救われる。いま問い直されるべきは、そうした宗教に基づく道徳の論理なのではないか。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」

大乘仏教の人間像

—菩薩とは、目覚めようとして生きる存在—

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」の第6回から第8回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第6回では、「諸仏の国」について、第7回では「諸仏護念」について、そして第8回では「魔、声聞・縁覚、滅度」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第4回からその一部を紹介する。

(嘱託研究員 越部良一)

■ 普賢の徳を修する

『無量寿経』（『大無量寿経』）の教えを説き始める一番最初に、この教えを誰が聞いたか、聞いた人の名前が並べられています。そこに、お釈迦さまの時代の上^{じようそく}足の仏弟子たちと並んで、大乘の菩薩方が出されてくる。その筆頭に「普賢菩薩」の名が出され、そして「みな普賢大士^{だいじ}の徳^{した}に^{ぎようがん}違^だって、もろもろの菩薩の無量の行願を具し一切功德の法に安住せり」（『真宗聖典』2頁、東本願寺出版部。以下、『聖典』と略称）と。普賢というのは、大乘仏教の物語上の人物で、歴史的人物ではないのですが、この名前が『無量寿経』の教えを聞く菩薩たちの筆頭に出されているということが、この經典のひとつの性格を示しているのではないかと思います。

親鸞聖人は『教行信証』のなかで、行^{あらわ}を顕して、南無阿弥陀仏が人間の心を開くときには、「衆禍^{しゆか}の波^{なみ}転ず」（『聖典』192頁）、諸々の禍^{わざわい}の波を転じて、「光明の広海」（同）に浮ぶのだと。非常に比喩的な表現ですが、名のはたらきを信じて、名が身に響いてきたならば、いろいろな禍を転じ、苦悩を転ずる、その

苦悩の闇が晴れて、光の海に浮かぶような存在になる。そのときには「普賢の徳に遵うなり」

（同）と、この「普賢」という名前を出しているのです。親鸞は、この經典が語る普賢というあり方こそ、人間が本当に成るべきあり方であり、われわれのような愚かな罪惡の深い人間が実現することができるあり方として、この名前を出してくるわけです。

普賢という名前については、本願の二十二番目の願、非常に大事な願なのですが、そこに「普賢の徳を修^{しゆじゆう}せん」（同19頁）ということが出てきます。それはどういうことかという、浄土に生まれるということは、生まれて終わりなのではなくて、今度は、あらゆる世界に行ってはたらかないと。われわれからすると、苦悩の場所が嫌だから、浄土というすばらしい場所があるならいこうかということでしょう。ぬくぬくとあたたかい状態にとどまられるのではないかというのは、苦悩の生命を生きている人間の逃避的感情ですね。そういう人間が要求した浄土のイメージは、そこへいったらいつまでも「ゆっくり休んでください」と申辞でよく言うような、楽しく、また熟睡できるような場所です。そういうイメージで呼びかけられていてみたら、豈^{あにはか}図らんや、「自分で、どうぞはたらかなさい」と、こう言われる場所になる。言われるというよりも、自分でそう^{ほう}欲する。その力は阿弥陀の力である。エビがころもを付けられた天ぶらになるように、浄土に触れたら、阿弥陀のころもで守られて、どこへでもいける。そこにいるよりも、むしろもっとはたらかたいというふう^{すがた}に、立ち上がっていく。そういう相として、普賢の徳を修するということが言

われるのです。

■「無上尊となるべし」

菩薩さまという偉い人だということになってしまっているのですが、菩薩というのは、もともとの意味は、目覚めようとして生きる存在を言うのです。菩薩は、特に大乘仏教の人間像だと言われますが、個人が個人的にたすかるというよりも、人類の苦悩を背負った個人が、人類的苦悩を克服する。そういう歩みが「菩薩」と名づけられる。

「常行大悲」、常に大悲を行ずるという言葉がありますが、普賢菩薩のひとつの行為に、「常行懺悔」ということがあるのだそうです。過去の罪だけではない、現在の罪、未来の罪、これを常に懺悔すると。こういうことをもって行とするような菩薩を、大乘の菩薩方の一番初めに出して、そして「一切功德の法に安住せり。十方に遊歩して権方便を行じ、仏法の蔵に入りて彼岸を究竟し、無量の世界において現じて等覺を成じたまう」(同2頁)と、ずっとそうした菩薩の行として展開されてきます。

そして、次に「兜率天に処して」(同)という言葉が出てきます。兜率天というのは、インドの天の一番高みにある天の名前だと聞いていますが、その兜率天で「正法を弘宣」(同)していたのが、「かの天宮を捨てて」(同)、その兜率天を捨てて、「神を母胎に降す」(同)と。「神」は精神という意味で、母親のお腹のなかに降りてきたと。そして「右脇より生じて現じて七歩を行ず」(同)と。これは仏伝にならっているわけですが、ここでは「みな普賢大士の徳に違つて」という文脈で出てきていて、大乘の菩薩方の姿を語っているので、直接、お釈迦さまのことを語っているわけではない。お釈迦さまが生まれてきたときには、生まれた途端に七歩歩んで、「天上天下唯我独尊」と言ったという伝説がありますがけれども、ここでは、「声を挙げて自ら称う。『吾当に世において無上尊となるべし』と」(同)。

これは文学的な表現ですから、どう感じ取るかというのは、人によって違うのかもしれない

んが、兜率天、これは天のなかの天、一番楽しい天だと言われている。一番寿命が長いし、一番美しいし、一番透明である天。そういう天にいた存在が、この五濁悪世に降りてきているのだという、そういう人間像です。そして、ここに生まれて生きているということは、無上尊と成る、仏に成るということだと。仏陀の覺りの世界、苦悩を超えたあり方にかえることだと。これは人間存在として生まれた、一人ひとりの生命に、仏陀が呼びかける課題が与えられているということだと思うのです。

われわれは「俺の人生は、俺が苦しんでいればいいのだ」と思っている、仏陀が呼びかける衆生、「苦悩の衆生よ」と呼びかけている相手は、皆、実は一番楽しい世界、一番美しい世界のいのちをあえて捨てて、この苦悩の生命に來たのだと。この苦悩の生命をいただいて、そこで何より尊いものとなるのだと。われわれはこれを読んで自分のこととは思わないし、自覚できない。「ああ、そういう偉い人もいるのかな」というくらいにしか思わないけれど、実は、普賢大士という名前は、われわれと無関係ではない。こういう菩薩になるべく、われわれは教えを聞き、教えに出会い、そうすれば必ず、普賢大士の徳に違ふことができるのだという呼びかけです。こういう課題が与えられてあるということを、まず、この普賢大士の功德のところで、われわれに暗示しているのではないかと思うのです。(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

公開で開催の本講座は、自由に聴講(無料)いただけます。

記

日時：2007年 9月 休 会
10月2日(火)午後6時30分～9時
11月1日(木)午後6時30分～9時
場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分
テキスト：「真宗聖典」大・A5判 ￥3,500
小・B6変形判 ￥3,000

ご希望の方は、下記(京都・東本願寺出版部)まで。
TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211
<https://books.higashihonganji.jp>

現代と親鸞の研究会・第24回

現代社会に親鸞思想は応え得るか

映画監督 森 達也

社会評論家 芹 沢 俊 介

2006年11月29日、アルカディア市ヶ谷（千代田区）において、講師に映画監督の森達也氏を、コーディネーターに社会評論家の芹沢俊介氏をお迎えし、「現代と親鸞の研究会」を開催した。今回の研究会は、先に開催の森氏の問題提起「現代における存在の不安と宗教」（同年5月16日）を受けて、まず、親鸞仏教センター研究員が発題（レポート）を行い、その後、両氏から、ご自身の課題を提起されながら討議を行った。ここに、その一部を紹介する。本紙では、研究員の発題は省略するが、発題を含めた研究会の詳細は、『現代と親鸞』第13号（2007年12月1日号）に掲載予定である。（囑託研究員 本多雅人）



森 達也（もり たつや） 映画監督

1956年、広島県に生まれる。立教大学法学部卒業。98年にオウム真理教を追跡したドキュメンタリー映画『A』を、02年に『A2』を発表。著書に『こころをさなき世界のために—親鸞から学ぶ〈地球幼年期〉のメソッド』（洋泉社）、『A マスコミが報道しなかったオウムの素顔』（角川文庫）など多数。また『アンジャリ』第10号に「宗教とメディア、そして善悪の彼岸」を執筆いただいている。

■ 森達也氏からの問題提起

親鸞仏教センター研究員の発題（レポート）の「善悪の二分に対しての^{あらが}抗いというものは、釈尊からずっと続いている大きな課題である」ということを聞いて、なるほどと思いました。オウム事件以降、特にメディアが次々に社会の仕組みを変え、人の意識を変えています。メディアを通して、単純化、簡略化、善悪の二分化が行われ、善悪の^{あいだ}「間」というものが、不安や恐怖^{こうしん}が昂進する世相のなかに消えていつてしまっている状況が進んできているように思っています。

最近、真宗のある方から、「阿弥陀如来の言葉の意味を知っていますか？」と聞かれました。僕は、「如来はわかるけど、阿弥陀はわからない」と言うと、彼は「弥陀」というのは計

るとか、わかるというサンスクリット語で、「阿」は反意語だと。つまり、「阿弥陀」というのは「計り知れない、わからない」という意味だから、阿弥陀如来というのは、人間が計り知ることのできない仏さまという意味だと説明されました。一神教であれば、このような考え方はおそらくあり得ないでしょう。でも、仏教ではそれが成り立ちます。つまり、わからない領域があるというか、「わかる」「わからない」を超えてしまっているのです。「わかる」と「わからない」が二分しないのです。もう、「無量」である。仏教は、そこから始まっていると感じました。

それから、『教行信証』に「真」「仮」「偽」という言葉がありますが、これを僕流に解釈すれば、「真」と「偽」は相反する要素です。つまり、真実と虚偽です。親鸞は、さらに「仮」



芹沢 俊介（せりざわ しゅんすけ） 社会評論家
1942年、東京に生まれる。65年、上智大学経済学部卒業。文学論、家族論、状況論など幅広い分野で評論活動続ける。著書に『オウム現象の解説』（筑摩書房）、『引きこもるという情熱』（雲母書房）など多数。また『現代と親鸞』創刊号で「現代における教育と家庭の課題」を、『アンジャリ』創刊号で「名づけということ」を執筆いただいている。

をおき、「間」、つまり曖昧を残しました。実は「真」「偽」は概念として明確だが、現実には「仮」だと。これは、まさしくいまのこの世相に対してのアンチテーゼです。多面性への提示で、「間」にあるものへの眼差しだと思います。そういった部分で親鸞を紐解くと、僕にはとてもフィットするのです。例えば、僕はドキュメンタリーを生業にしていますが、「ドキュメンタリーとは、ひとくちで言って何ですか？」と聞かれると、最近は「単純化への抗いです」という言い方をしています。そういう意味では、親鸞は、このわかりやすさに抗うのです。

僕が親鸞に惹かれる背景には、きっと簡略化、単純化、善悪の二元化に対しての問題性を感じているからではないかと思っています。ですから、その意味では「現代社会に親鸞思想は応え得るか」ということは当然だと思いますし、応えどころか、大きなアンチテーゼとしての起爆剤になってくれるはずだと思っています。

■ 芹沢俊介氏からの問題提起

親鸞仏教センター研究員の発題（レポート）を聞いて共感したのは、「いま、ここにある自分を受け入れて生きていくことが救いだ」という点と、「業縁存在」ということです。「業縁存在」という言葉自体、すでに善悪を超えていま

す。僕は、これまで「イノセンス」(innocence)という考え方を提出してきました。責任がないという意味で使っています。根源的受動性です。子どもからすれば、生まれたことに自分の意志・選択がいっさい関与していないこと、つまり、生命や身体などを強制的に贈与されています。だから、産まれたことのイノセンスの表出に対して、そのイノセンスの表出がしっかりと受け止められる条件が成立したときに、イノセンスは解体されていく。すなわち「いま、ここにある自分を受け入れて生きていくことが救いだ」という、そういう図式を作ってきました。

この図式は、親鸞が『教行信証』に『涅槃経』を引文する「阿闍世の物語」と響き合えるのではないかと考えています。阿闍世という「業縁存在」が、どのように自分の生を受け止めていくのかを見ていくときに、まず、親殺しの前に子殺しが先行しているという考え方が提起できるのではないかと考えています。ですから、単にイノセンスの表出を受け止めるだけでなく、父親が子ども殺しを画策していたことを知ってしまったという、付加されたイノセンスの表出も受け止めること、これが阿闍世の物語ではないかというのが僕なりの読み方です。

そして、受け止められた体験には、受け止め手が不可欠です。最初の受け止め手は父親の頻婆娑羅、続いて耆婆です。もう一方では、「父を殺せ」と唆す提婆達多も非常に大きな役割を果たしていて、イノセンスの表出を促していく力だと位置づけることができます。要するに、唆されるということは、そのイノセンスの表出を促す人として、非常に強いはたらきをしたのだと見るすることができます。

そして、受け止め手の耆婆によって初めて、阿闍世は、釈迦に心を開いていくのです。このプロセスによって、「いま、ここにある自分を受け入れて生きていく」という「自己受け止め」が可能になり、イノセンスが解体していくのではないかと考えています。

（文責：親鸞仏教センター）

● 英訳『教行信証』研究会報告 ⑤ ●

真宗用語の英語表現

—さらなる理解を求めて—

親鸞仏教センター研究員 羽 塚 高 照



英訳『教行信証』研究会は、現在、月例の研究会において鈴木大拙訳『教行信証』『行巻』の読解を進めている。この通常の研究会に加え、2006年3月28日には龍谷大学教授のヒロタ・デニス氏を、2006年11月21日にはロンドン仏教協会理事の佐藤平氏をそれぞれお招きし、講義をいただいた。

今号では、両氏の講義内容を紹介し、第5回報告とする。ただし、紙幅の都合上、ここでは両氏の講義のごく一部を筆者の言葉で要約できたにすぎず、詳細については、『現代と親鸞』に所収の、あるいは今後刊行の、研究会報告をご覧ください。



■ 鈴木大拙の「戦略」

ヒロタ氏には「英語圏における親鸞思想—現代的理解と表現を求めて—」と題して、おおよそ次の三点についてお話いただいた。すなわち、1) 大拙がどのように親鸞思想を英語で表現し、説明しようとしたのか。2) それが大拙の『教行信証』の英訳のうえにどのように現われているのか。そして、3) 親鸞思想がもつ「言語性」の特徴と今後の西洋における真宗理解の展望と問題点、についてである。ここでは1) について、その内容を要約して紹介する。

ヒロタ氏は、『教行信証』の英訳に加え、“The Development of the Pure Land Doctrine in Buddhism.” (*The Eastern Buddhist*, Vol. 3 No. 4, 1925)、“The Shin Sect of Buddhism.” (*The Eastern Buddhist*, Vol. 7 Nos. 3-4, 1939) といった、『教行信証』の翻訳より以前に書かれた大拙の論文も視野に入れながら、大拙が真



ヒロタ・デニス (Hirota Dennis) 龍谷大学教授

1946年、アメリカ・カリフォルニア州に生まれる。カリフォルニア州立大学バークレー校文学部卒業。同大学院修士課程修了。文学博士（名古屋大学）。日本浄土教専攻。71年来日。『*The Collected Works of Shinran*』（親鸞著作全訳・解説、本願寺出版社）の主任を務める。ハーバード大学世界宗教研究所客員研究員、国際日本文化研究センター客員教授、ハーバード大学客員教授などを歴任。著書に『親鸞—宗教言語の革命者』（法蔵館）、『*Asura's Harp*』（親鸞思想と哲学的解釈学、U. of Heidelberg）。論文に『親鸞の言語観』（『思想』871号）など多数。

宗を解説する際の「戦略」には、(1) 主体性を根本にして宗教のことを理解していこうとする態度、(2) 抽象的な概念ではなく、実際の人間のうえに起こる宗教的な経験を重視する態度、が看取できると言う。そして、これらの大拙の態度には、スウェーデンボルグ (E. Swedenborg, 1688-1772) の神秘思想や、ウィリアム・ジェイムズ (William James, 1842-1910) の『宗教的経験の諸相』(*The Varieties of Religious Experience*, 1902) ——大拙が渡米中に出合ったであろう西洋思想——と重なる部分がおおく、大拙はそれらを刺激として、仏教に対する新しい表現を求めていったのであろう、と指摘する。

また、大拙が親鸞思想を英語で表現しようとするとき、あるいは翻訳語を決めようとするときには、「真宗とキリスト教との比較」が意識



佐藤 平(さとう たいら) ロンドン仏教協会
理事

1939年、大分県に生まれる。62年、京都大学文学部卒業後、64～66年、鈴木大拙師に師事。71年、京都大学大学院宗教学科博士課程終了。同年、大谷女子大学（現・大阪大谷大学）講師及び『イースタン・ブディスト』編集員に就任。80年、大谷大学非常勤講師に就任。91年、大谷女子大学教授及び大谷大学非常勤講師を辞任。現在、ロンドン大学 SOAS 教授資格研究員。SOAS 仏教研究センター運営委員会理事。ウェールズ大学世界宗教経験研究所客員教授。論文に「大行」（『鈴木大拙とは誰か』岩波現代文庫）など多数。

されていたのではないかとヒロタ氏は言う。つまり、「願」の訳語である prayer、「信」の訳語である faith など、キリスト教で伝統的に使われている言葉が翻訳にも使用されている場合、大拙には、たとえキリスト教の色が濃い言葉であってもそれは使ってもよい、という判断があったはずである。大拙は、それらの言葉を採用することによって、真宗のもつ普遍性を表そうとしたのである、と。

※ヒロタ氏の講義は、『現代と親鸞』第12号（2007年6月号）に掲載しています。

■ 表現と実在との距離

佐藤氏には「真宗を英語で表現することの課題と可能性」と題して講義いただき、具体的な語彙を挙げながら、真宗用語の翻訳の問題について、そして佐藤氏が試みておられる英語表現についてお話いただいた。

真宗用語、さらに広く言えば宗教的な言語を翻訳しようとするとき、まず意識されるべきは、「表現と実存との距離」である、と佐藤氏は言う。そこで求められるのは、表現されている内容を自分自身の実存の深まりのなかで「再体験」すること、言い換えれば、自分自身の実存のなかで「咀嚼」すること、である。もち

ろんこれは、親鸞思想や『御文』『歎異抄』などの内容を英語で表現しようとする場面に限られたことなく、宗教的文献の正しい解釈を求めるときには常に出てくる問題である。

講義では、「信心」「恩」「罪惡」「報土」「安心」「功德」「本願」「大行」という、いずれも親鸞思想を理解するうえでは欠かすことのできない、きわめて基本的な——それだけにわれわれが意味を問いつくことをしようとしないうな——言葉に対して、ときにはこれまで使用されている翻訳語の問題点を指摘しながら、ときにはサンスクリットさかのぼの原義にまで遡りながら、それぞれの言葉の意味、そしてそれが指し示そうとする内容を慎重に尋ねていった。そして、佐藤氏が試みてこられたそれぞれの英語表現を紹介していただいた。いま数例を示せば、「信心」には faith を使うが、ただし、親鸞の「信心」には「目覚め」(awareness) ということが含意されていることをきちんと説明しながら、これを使うこと。あるいは、「報土」は従来、“land of recompense” とか “land of fulfillment” と訳されてきたが、これでは何のことか理解してもらえない。そこで、「報土」とは、「法蔵菩薩が願に報いて阿弥陀仏として自らさとの果を愉しみ、他の衆生もその果を愉しむことのできる国土」のことであるから、それを一言で “land of enjoyment” と訳してみること、などである。

佐藤氏は長年、真宗を表現しようと努めてきたご自身の経験から、本当の意味を探索する「謙虚な」態度の必要性を強調する。テクニカルタームだけをそのまま濫用しては、宗教文献の内容を理解することはできないし、ましてやそれを人に伝えることなど不可能である。わかっているという「思いあがり」をいったんゼロにして、表現された宗教的言説が自分にとって何を意味するのか、という主体的な思索をしながら進んでいかななくてはならないのである。

※佐藤氏の講義は、『現代と親鸞』第16号（2008年12月号）に掲載の予定です。

■ 設立 5 周年記念——第 5 回「親鸞仏教センターのつどい」を開催（4 月 24 日）

親鸞仏教センターでは、去る 4 月 24 日、文京区の現在の地に開設された親鸞仏教センターの 5 周年を記念する第 5 回「親鸞仏教センターのつどい」を開催した。午後 1 時からセンターの仏間において「おつとめ」を行い、その後、会場を「学士会館本館」（千代田区）に移し、記念講演と交流懇談の「つどい」をもった。「つどい」には、大学教授、医学、法曹関係者、ジャーナリスト、宗教者、作家など各界の有識者約 150 名が出席し、文芸評論家の吉本隆明氏（写真上）と本多弘之所長が講演した。

吉本氏の「日本浄土系の思想と意味」と題する講演では、「恵信尼消息」や「自然法爾章」等の諸資料にも触れられての吉本氏の思索から、「親鸞は、初めから浄土教を日本独自のものとして、新たにつくりあげるにはどうしたらいいかを意識していたのではないか」と論じられた。そのうえで、まさに親鸞思想の真髄は、浄土は実体的にあるのではないということ。そして、信仰上の問題として臨終の形などは問わないということなど、親鸞の思想と意味について力強く語られた。

続いて、本多所長の「親鸞の人間像と時間」と題する講演では、浄土教が説かれる機縁となった「王舎城の悲劇」などを紹介しながら親鸞の取り上げる人間像に触れ、「（吉本氏を受けて）これまでの死後往生に限定された『浄土』観の解体によって、あらためて人間に与えられる浄土の功德を、親鸞は『現生正定聚』と押さえたのであり、天親・曇鸞によって明らかにされた現生正定聚の教えこそ、いまここに、この苦悩のいのちを生きている凡夫であることと、何の矛盾もなく獲得できる救いなのである」と述べた。

引き続きの交流懇談会では、里雄康意・真宗大谷派参務の挨拶の後、清水博氏（「場の研究所」所長・東京大学名誉教授）から祝杯（写真下）の言葉をいただいた。また、竹内整一氏（東京大学大学院教授）、田中克彦氏（一橋大学名誉教授）、味村登氏（静岡県立大学名誉教授）、暉峻淑子氏（国際市民ネットワーク代表・埼玉大学名誉教授）、加藤智見氏（東京工芸大学教授）、金子務氏（大阪市立大学名誉教授）、守谷季美枝氏（特定非営利活動法人国境なき子どもたち専務理事）、草野顕之氏（大谷大学文学部長）から、それぞれ激励の言葉をいただいた。

※講演記録は、「現代と親鸞」第 15 号（2008 年 6 月 1 日号・1 冊 1,200 円）に掲載の予定です。



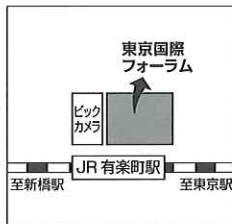
■ 第 1 回公開講演会のご案内

- ①テーマ いのちの不思議さ—科学と宗教の生命観—
- ②日時 2007 年 12 月 14 日（金）
午後 6 時 30 分～9 時 30 分（受付：午後 6 時）
- ③講師 清水博氏（「場の研究所」所長・東京大学名誉教授）
本多弘之（親鸞仏教センター所長・大谷大学大学院講師）
- ④聴講料 **無料**
- ⑤定員 200 名
- ⑥後援 大谷大学
- ⑦問い合わせ

親鸞仏教センター公開講演会 T 係
〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7
TEL 03-3814-4900・FAX 03-3814-4901
E-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

⑧会場

東京国際フォーラム ホール D 5
JR・地下鉄とともに、「有楽町」駅より徒歩 1 分



本多弘之所長の講演録

「親鸞思想の解明」が本になります

本紙でも取り上げてきた「親鸞思想の解明」（全 47 回分）が、今秋、樹心社から出版されます。吉本隆明氏（文芸評論家）、芹沢俊氏（社会評論家）、帯津良一氏（帯津三敬病院名誉院長）から推薦の「序文」をいただきました。一人でも多くの方々にご購読いただきたいと願っています。

発行書籍

- 第 1 巻『浄土 その解体と再構築』
（2007 年 9 月発行／序文：吉本隆明氏）
- 第 2 巻『浄土 その響きと言葉』
（同年 10 月発行／序文：芹沢俊氏）
- 第 3 巻『浄土 大いなる場のはたらき』
（同年 11 月発行／序文：帯津良一氏）

価格

各巻共に 1 冊 2,600 円（送料・税別）

問い合わせと申し込み

樹心社（TEL 042-577-2778、FAX 042-577-2758）まで。



あ と が き

第 5 回「親鸞仏教センターのつどい」には、文芸評論家の吉本隆明氏をお迎えすることができた。氏には、当センター開設の翌年、情報誌『an'jali』第 2 号に「永遠と現在—親鸞の語録から—」（2002 年 1 月 15 日号）と題して、「歎異抄」を取り上げて執筆いただいており、その当時から、ぜひ一度、研究会などで直接、お話をうかがいたいと念願していた。しかしながら、その後、新聞等の報道を拝見し、身体のご様子などについて心配していたところ、昨年（2006 年）の秋、新たに著書を上梓されるなど、最近の氏の精力的な活動に触れることができ、ありがたいことにこのたびのご出講をいただいた次第である。講演ではご自身の思想や思索を自由に語ってくださり、深い感銘を受けた。講演記録は、「現代と親鸞」第 15 号（2008 年 6 月 1 日号）に掲載の予定である。ご期待ください▼このたび本多弘之所長の講演録「親鸞思想の解明」が、樹心社から 3 巻本として刊行されることとなった（上記参照）。2001 年 11 月、この講座開設の趣旨文には、次のようにその方向性

を示している。「……人間が有限であり、自己の存在の意味に苦しみものであり、単に世俗の物質的豊かさで満足成就するものではないことは、時代が変わっても少しも変わらない人間の本质である。そこに、親鸞聖人の「非僧非俗」の人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こすべき課題があると思う。仏教思想を時代社会の関心の言葉で考え直してみたいのである」と。この 5 年間、月 1 回、大勢のサラリーマンが集まる丸の内、有楽町にある「東京国際フォーラム」を会場に、この講座を展開してきた。この書物をおとして、現代を生きる者にとって「浄土」とはどのような意味をもつのか、あらためて親鸞が頭を悩ませようとする「顕浄土真実」の教えを、それぞれの生活の場で掘り起こしていただきたいと願っている▼2007 年 7 月 1 日、親鸞仏教センターのホームページに新企画「ブックレビュー（書評）」が誕生した。当センターの研究員が現代のさまざまなジャンルの課題を考えるうえで手がかりとなる書籍を紹介するコーナーである。今後も、皆さまのご意見、ご感想をお待ちしています。（長谷岡）